

戦中・戦後を生き抜いた乙女たちは、今！！ (※1)

第 22 回卒 佐藤 マサル (※2)

「アーラ しばらくね。」と、判ったような顔をし挨拶しても誰だか思い出せない。

「どなただったかしら？」と穴のあく程見つめ合って、やっとあのおさげ髪で可愛い瞳の〇〇さんと判り、手を取り合って 40 年振りの再会を喜び合った。

それは、昭和 58 年 3 月 6 日松川浦亀屋旅館で松崎 (※3) 先生をお迎えして 42 人が出席した同窓会であった。私は、結婚し小学校教師として、県内を方々転勤していたのでやっと住所が判り連絡がとれて最初に参加した同窓会である。

顧りみれば私たちは、昭和 18 年 4 月、中村高女第 22 回生として 157 名が入学、翌年 2 月学徒動員で郡山の軍需工場で風船爆弾をつくっていた。昼は工場で働き夜は灯火管制下の薄明りの下で授業を受ける毎日だった。昭和 20 年 3 月同所で卒業ということだったが、学校の方針で学校に戻り卒業式をやることになり全員帰宅を許された。

それから 20 日後の 4 月 12 日に郡山大空襲で私たちの働いていた工場は灰燼に帰したので本当に命拾いをしたわけである。その時の写真『神風』の鉢巻姿などが見つかри、一層当時のことが思い出された。

私たち 157 名は、このようにして戦争の末期から戦後の衣食住難、加えてインフレ就職難など歴史の荒波の中に、社会人として人生に船出したのだ。そんな中で結婚・出産・子育て・嫁づとめと、言葉に言い尽くせぬ苦労を重ねた同級生が 40 年振りに会ったのである。卒業以来の女の苦労話に共に泣き、苦労を切り抜け現在暖かい家族に囲まれて幸せな暮らしをしていることに、手を取り合って喜び合い時の経つのも忘れて語り合ったものである。

昭和 63 年には、いわきのハワイアンズで 33 人が出席し、東京から渡部 (※3) 先生をお迎えし盛大に同窓会を開いた。この時から宿泊ということにしたので一層盛り上がりを見せている。

その後も松川浦・原町・松島などで、毎回 40 人前後の出席者があり同窓会を開いている。話題は家族のこと・病気を克服した体験談や漢方薬や健康保持の方法などである。

平成 7 年の松川浦荘の集りでは、私が持ちよった『ボケ防止小唄』で歌い、心身共にリラックスした時を過ごした。次の機会もユニークな唄をつくり、校歌と共に全員で声高らかに歌って更に意義ある同窓会『竜美会』にしたいと考えている。

(※1) 『相中相高百年史』 (1998 (平成 10) 年 7 月 6 日発行) 「第一部 第三章 中村高女」より。

(※2) 旧姓 荒木。中村出身。昭和 20 (1945) 年卒。相馬教員養。

(※3) 松崎道貞?。地。

(※4) 渡部道子。裁。

戦争にまみれた青春 (※1)

第22回卒 鎌田 トミ子 (※2)

昭和18年4月、私達も人並に夢と希望に胸ふくらませて高女に入学した。しかし日本はその頃から敗戦に向かって静かにすべりだして居たのだ。

初めての英語に胸躍らせて居たのに、次回には「敵国の言葉は禁止」となり、僅か2時間で英語はストップ、体育はバレーなど全く知らず、ひたすら中尉殿の軍事教練に明け暮れたのである。

そんななかで、ガダルカナル・アッツ島と次々に日本軍の玉砕が報じられるようになり、軍需工場で働かない学生は非国民？と錯覚するような世相になっていた。

そして19年2学期に入って間もない10月、私達の高学年2百名は、いよいよ郡山の軍需工場に出発することになった。郡山は寒い所と聞いていたのに最も寒い半年間、私達は頑張ったのである。

冷たいコンニャク糊で風船爆弾の風船を懸命に作りながら、こうして働いていることが国のお役にたっているんだなと、心の安らぎを覚えたものである。

ただ私達が必至で作っているこの爆弾がどこで活躍しているんだろう。その成果が全くわからず不思議でたまらなかった。

食事は精白なしの小麦そのままに玄米が入っているもの。おかずはさつまいもの茎やら南瓜の茎等、得体の知れないものばかり。量は総合しても茶碗一杯分。私はベルトを最強に締めて食事に臨んだものだ。はじめ数日は下痢が続き、こんなもの食べられないと泣いていた級友もいた。

こんな生活が6ヶ月続いた20年3月、「一応卒業式に帰宅するが引続きここで働く人。」と言われ、私もためらわず申し出た。

しかし学校側の方針で全員引揚となり、お陰で20日後4月12日の郡山大空襲に遭遇することなく、命拾いした次第だ。

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998(平成10)年7月6日発行〉「第一部 第三章 中村高女」より。

(※2) 旧姓 渡部。上真野出身。昭和20(1945)年卒。

今に残る被服のノート (※1)

第24回卒 穴沢 トヨ (※2)

昭和20年4月の入学で、大東亜戦争も終盤戦に近い頃でした。

教練や原町飛行場で防空壕の作業等に従事。毎日の通学には防空頭巾を肩に掛け、学校では落ち着いた毎日の授業は、空襲や警戒警報発令で正常な教育は受けられなかったように記憶しています。

1年1学期の成績通信表には学校への出席日数は99日となっているだけで、各教科の成績は記入されていません。

終戦の第2学期早々には、占領軍が上陸して来るので、女子の貞操について、十分気をつけること等指導されたのを覚えております。

当時は生活も苦しく、食糧難と衣料その他物資の不足のため、何でも配給制でした。

家では、敗戦だから学問はいらないといわれたが、そのまま続け卒業することが出来ました。

入学時は女子商業学校でありましたので、簿記・商業実習や商経の授業があっても好きな教科でなく、成績は良い方にはなれませんでした。

家政科の被服は、日常身に付けるものであり、女子の身近な教科なので頭に入りやすく、自分の銘仙の裕、男物では父の手前織の絹の、古い着物をほどいて、縫目のしわをのぼして教材に用いました。

被服は渡部道子先生の教科担任であった裁方、標付縫方（衿付袖付つま）男物の人形内揚等。この思い出を記していると、今でもはっきりしたお声が聞こえてきそうな気がします。

なぜか、すすけた被服のノートが一冊残っているのです。

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998(平成10)年7月6日発行〉

「第三部 第二章 馬城会の歴史 及び 第一部 第三章 中村高女」より。

(※2) 旧姓 金子。中村出身。昭和22(1947)年卒。